特集1｜続・生き続ける建築

8

日清戦争中の1895年に岐阜県に生まれた堀口捨己は、第六高等学校を経て、東京帝国大学工科大学建築学科に進んだ。
卒業を控えた1920年2月に石本喜久治、瀧澤眞弓、森田慶一、山田守、矢田茂と分離派建築会を結成した。
彼らは自分たちの主張をアピールするために展覧会を開き、作品集を出版した。
日本の近代建築運動の先駆けといわれる所以である。

–

堀口は平和記念東京博覧会［1922］の幾つかのパビリオンを皮切りに設計活動を始めた。
彼は当時のヨーロッパの最新の動きに精通し、日本人建築家としてそれにどう対抗するかをテーマにした。
そこで彼が注目したのが茶室であり、千利休である。
彼は数寄屋造りを日本建築の精華とし、そこには線や面による構成の美や機能性があると賞賛した。
それは近代建築のフィルターを通した伝統理解であり、
この見方をもとに、数寄屋造りの普遍性と日本の独自性・優越性を共に主張した。
“普遍性”とは近代建築と同様の教義を持つこと、つまり現代にも有効な価値的であることを訴えるもので、
“独自性”、“優越性”は、ヨーロッパが20世紀にようやく気づいた非相称性重視の美学を
日本は何百年も前に数寄屋造りとして実現している、つまり先んじていると見た。
そのような彼にとって、和風建築も当然ながら現代建築であり、
その根底にある建築観や美学は、彼の鉄筋コンクリート造の作品と何ら変わるものではなかったのである。

–

ここでは、若い頃はモダニストで、やがて日本回帰した建築家のひとりと見られがちな堀口を、全く異なる視点から再評価する。

堀口捨己

Sutemi Horiguchi

写真提供：筆者

卒業設計「精神的なる文明を来らしめんために集る人々の中心建築」断面図正面［部分、1920］
［所蔵：東京大学大学院工学系研究科建築学専攻］

堀口捨己の和風建築――論理性・現代性重視の“強い表現”｜藤岡洋保｜Hiroyasu Fujioka

堀口捨己［1895–1984］については、若い頃は近代建築に傾倒し、日本の新建築をリードする存在だったが、やがて伝統に関心を移し、“和風建築の大家”になったといわれることが多い。普遍性重視の近代建築から日本回帰した建築家のひとりというわけである。しかし、和風建築の設計は単なる伝統墨守ではできないので、両者に共通する建築観や美学に注目する方が、堀口をより深く理解するのにふさわしい姿勢と思われる。

彼の和風建築は「八勝館みゆきの間」［1950］や「八勝館さくらの間」［1958］、「磵居（かん）」［1965］で代表される。その特徴は、論理性と現代性を重視しつつ、それらを“強い表現”にまとめあげることにある。

論理性重視というのは、恣意的にではなく、存在意義が主張できるかたちでさまざまな要素を用いることを意味する。和室や茶室の古典のモチーフを引用するのがその典型で、「みゆきの間」の、小壁いっぱいに入れられた明かり障子は「桂離宮古書院二の間」と広縁の境にあるものだし、天井棹縁の変化に富んだ卍崩しのデザインは、「三渓園臨春閣の住之江の間」の天井に想を得ている。つまり、古典を典拠に、その要素の正当性を主張するわけである。

現代性重視とは、現代生活に適応する和室を設計することである。それは和室に照明や空調を組み込むことであり、使い勝手に配慮することである。堀口は、伝統的なモチーフを利用して照明や空調をとり入れた。その代表例が掛込み天井（化粧屋根裏）で、これは「妙喜庵待庵」などの茶室に見られる掛込み天井のモチーフを利用して、その出隅部の立ち上がりに明かり障子を入れ、その後ろに照明や空調の吹き出し口を仕込むとともに、その平天井側の端部に素通しの格子を配することによって照明や空調に対応するというもので、古典のモチーフを見立てたわけである。また、室内のアメニティ向上のために、「八勝館さくらの間」では、明かり障子を太鼓張りにして断熱性能を高めようとしたし、「磵居」の広間と月見台の境にサッシュなしの透明アクリル引き込み戸を入れ、それを閉めて空調を効かせつつ、障子を開放して“草庭（くさにわ）”の景色を楽しめるようにした。「みゆきの間」では、一の間、二の間、入側（いりがわ）境の建具を適宜開閉できるようにして、人数に応じた可変的な使い方を可能にした。これは機能性重視ということで、堀口にとっては現代性への対応ということになる。

堀口の和室には、村野藤吾［1891–1984］や吉田五十八［1894–1974］のような自由闊達さはない。彼は、古典のモチーフをあくまでも正統的なかたちで使おうとした。また、明かり障子の桟を障子紙の幅の規格（9寸2分）を基準に割り付けたが、これは障子紙を無駄なく使うという意味で、合理性重視の表れである。村野や吉田のものが“艶っぽい”とすれば、堀口の和風は“理屈っぽい”のである。

このような手法は、堀口の美学の反映でもある。たとえば、掛込み天井や卍崩しの棹縁天井などの古典建築のモチーフを使うことは、合理主義的思考（理性重視の考え方で、モノの存在意義を論理的に説明できること）にもとづいているとともに、非相称で、ダイナミックな空間構成を好むという彼の美学の表明でもある。小壁いっぱいに切られた明かり障子というのも、単なる古典の引用ではなく、明るい空間を好むという彼の美意識の一例である。堀口は明るさを好んだ。彼の茶室には、躙口（にじりぐち）に明かり障子を立てたものがあるが、これは躙りの板戸を開け放ち、明かり障子を閉めて、明るい空間で茶の湯を楽しむという趣向である。ちなみに、「みゆきの間」の長大な床框や落し掛け、載金（きりかね）の摺箔裂地（すりはくきれじ）を裁断して構成した襖、天井の棹縁、変化に富んだ空間構成などにも、対比をテーマにしつつ、ダイナミックで強い表現を好む堀口の美学が見てとれる。

モチーフの典拠にこだわった背景には、日本建築に対する深い知識がある。「茶室の思想的背景と其構成」（『建築様式論叢』［板垣鷹穂らと共編著、六文館／1932］）の少し前から堀口は茶室を研究しはじめたようで、それが建築史や庭園史、茶道史の研究に拡がっていった。その成果が学位論

八勝館さくらの間｜「さくらの間」は名古屋への2度目の行幸のご宿泊所を想定して建設された（実際にはその目的では使われなかった）。掛込み天井の中に照明が仕込まれ、木の素通しの格子が水平に配されているのが分かる。右に見える明かり障子は太鼓張り。この写真右には竹張りのテラスがあり、そこの椅子に座った時の目線が畳に座った目線と合うようにテラスの高さが設定されている［撮影：2010年］

磵居｜広間。施主の希望を入れて栗材を多用しているが、その面を大きくとったり、なぐり仕上げにして、その荒さを手なずけつつ、桐材と組み合わせてバランスをとっている。月見台を非相称に配し、その縁の端に栗柱を立てて、空間に広がりとアクセントを与えつつ、庭の自然と対比する幾何学的要素として扱っている。明かり障子の外側にサッシュレスのアクリル引き戸があり、それを閉めてエアコンをかけると季節に関係なく室内から庭を楽しめる［出典：『堀口捨己作品・家と庭の空間構成』［鹿島出版会／1974］］

文「書院造と数寄屋造の研究——主として室町時代に於けるその発生と展開について」[東大/1944]である。ここで彼は、寝殿造りと書院造りを日本住宅の2大様式とし、その書院造りに茶室の美学をとり入れた“数寄屋造り”を日本住宅の最高峰と位置づけた。

数寄屋造り研究には、日本から西洋に向けてメッセージを送るという堀口の戦略が込められていた。彼は数寄屋造りを趣味的なものとも、日本でしか通用しないものとも見ていない。彼によれば、そこには、機能に対応した、水平線(面)・垂直線(面)による非相称性重視の構成美があり、それを日本の建築美の精華として賞賛しただけではなく、西洋の建築家も学ぶべき、現代にも有効な建築と見なしていたのである。

非相称性重視をはじめ、先掲の項目は近代建築(モダニズムの建築)の教義や美学に一致する。実は、これは昭和初期の日本の近代建築家が主張した“日本的なもの”の典型であり、“近代建築のフィルターを通した伝統理解”といえる。当時はいわゆる“帝冠様式”(鉄筋コンクリート造の建物の上に瓦葺きの勾配屋根を冠するもの)の全盛期で、「東京帝室博物館(現・東京国立博物館本館)」[1938]など、“日本趣味”を求めるコンペが盛行し、“帝冠様式”が上位を独占した。近代建築家はそれを厳しく批判した。彼らによれば、瓦屋根は寺院建築のモチーフで、それは中国起源だから“日本的”とはいえず、陸屋根で済むところにわざわざ重い瓦屋根を載せ、木造で発達した組物を鉄筋コンクリート造で模造するのは、構造合理性に欠けるのだった。

それに代えて、彼らは、それまで日本につくられた建物のうち、中国の影響を受けていないと考えられる神社・住宅・茶室に注目し、そこに共通する特徴として、平面・構造が簡素明快、素材の美の尊重、無装飾、非相称、庭との連続性などを“真の日本的なもの”とした。これらの項目はすべて近代建築の教義や美学に対応している。当時、これを偶然の一致と見て喜んだ建築家もいたが、合理主義を基盤とする近代建築のフィルターを通して見たことによる必然の結果というべきだろう。

このような伝統理解が提唱されたことには、日本を巡る当時の厳しい国際情勢も関連がある。満州事変[1931]や、それに続く国際連盟脱退[1933]で、日本は国際的孤立を深めていた。このような状況下で、“日本的なもの”が近代建築と似ているということは“日本固有の伝統”に普遍性があること(西洋と価値観を共有できること)を意味するし、その一方で西洋が20世紀になってようやく発見した価値(近代建築のこと)を日本では昔から大事にしてきたということになれば、日本人のプライドを満足させることもできる。普遍性と日本の優越性・独自性をともに満足させられる点で、また近代建築をつくることが“日本的なもの”を尊重することにもなるといえる点で、この“近代建築のフィルターを通した伝統理解”は都合がよかったのである。

堀口はその主導者のひとりだった。先掲の「茶室の思想的背景と其構成」で、茶室は単なる美的建築ではなく、茶の湯の所作に対応した機能的な建築であり、柱や棹縁、床や壁などの線や面による非相称の構成の美があるとして、その現代性を主張するとともに、パルテノンと対比しつつ、それに比肩する建築として称揚している。彼の見方では、西洋建築の古典とされるパルテノンは美しさのみを追求した建築であるのに対し、茶室は、規模は小さくても、西洋の建築家にも示唆を与え得る、現代的な建築ということになる。ここにも普遍性と優越性への関心がうかがわれる。

このように、堀口の“和風建築”には昭和初期という時代が刻印されている。それは伝統回帰という観点では彼を理解できないということであり、“和風建築”も彼にとっては“現代建築”だったという目でそれを見なくてはならないことを示唆する。

論理性・現代性重視の“強い表現”という点では、彼の鉄筋コンクリート造の作品も何ら変わりはない。堀口の“和風建築”は評価しても、彼の戦後の鉄筋コンクリート造の作品に意義を認めない建築家もいる。それが、太い柱を外に見せるなど、武骨に見えるからだろう。しかしそれは、堀口にとっては、素材や構造形式、規模がちがうだけで、同じ建築観や美学に支えられたものだったはずである。

たとえば、伊奈製陶(後のINAX、現LIXIL)の創業者・伊奈長三郎[1890–1980]の寄付で建てられた「常滑陶芸研究所」[1961]はその好例といえる。この建物では、展示室と事務室、和室など、機能やヴォリュームが異なる室を1つの建物に収めることが求められた。それに対して堀口は、天井の高い展示室を正面左側に、事務室や応接室、和室を右側に配した。正面の立面は、その構成を利用して非相称になっている。論理性重視と非相称に対する彼の好みを重ねて表現したわけである。そしてその頂部に3.5mも張り出した水平の軒を巡らせて、全体を統合しつつ、“強い表現”にした。

この建物で注目されるのは、派手な色を対比的に使っていることである。陶芸の施設ということもあってか、立面には一面に小口タイルが張られている。その色は紫だが、その彩度を場所によって変えて、壁面にグラデーションを出している。そして正面扉は銀色で、ドアノブ周囲の丸い金具は金色になっている。その両脇のガラス・ブロックの木口には紫色のペイントを施して、透過光が紫色に霞むようにした。玄関ホールの鉄骨の吊り階段は金色に塗られ、その天井は多彩な色で塗り分けられている。ちなみに、堀口は、自分の嫌いな色を1つ入れると表現が強くなる、と語っていたという。展示室は、展示ケース台を含めて、銀一色になっている。応接室では、掛込み天井が金色に塗られ、椅子の布張りは深紅である。この建物では、色の強烈な対比がテーマになっているわけである。

このように、鉄筋コンクリート造の建物においても、論理性と現代性を重視した“強い表現”へのこだわりが見られる。それは彼の“和風建築”とまったく異なるもののように見えて、実はそれを支える建築観や美学は同じなのである。堀口にとってはどちらも“現代建築”だったということで、現代にも有効な建築としてデザインしていたのである。

ちなみに、堀口の和風建築は千利休研究をもとにしている。『利休の茶室』[岩波書店/1949]や『利休の茶』[岩波書店/1951]が象徴するように、彼は利休[1522–91]の茶の湯に傾倒し、そこに機能に対応した非相称の構成や総合芸術指向、そして“たぎる侘び”(利休の表現の“強さ”への注目)を見い出し、利休を建築家、総合芸術家として称揚した。彼は、「残月亭」(表千家が伝えるもので、現在のものは1909年再建)、そしてそのもとになったといわれる利休の「九間書院」を数寄屋造りの典型と見る。そこには、機能に対応した、線や面という抽象的な要素の構成による非相称の空間の美があるのだった。堀口は、非相称の美学を利休に由来するものとし、日本の美意識の変革者として絶賛した。ここで堀口は、利休を通して自身の建築観や美学を語っている。利休研究は余技などではなく、建築家としての自己形成に決定的な影響を与えたものだったのである。

堀口の最大の魅力は、思想や研究、美学が一体となって“強い表現”に収斂し、ひとつの有機体になっているところにある。作品にもうかがえるように、彼は激しい性格の持ち主で、自分が信じたことを貫こうとした。堀口にとっては、建築も、庭園も、茶の湯も、和歌も、著作(その装幀を含む)もひとつながりの世界で、それらが一体になった“総合芸術”をめざした。それが通俗的なジャンルを飛び越えて独自の世界を開くことにつながった。たとえば、彼が編集した『ARCHITECTURAL BEAUTY IN JAPAN』[神代雄一郎と共編著、国際文化振興会/1955]には、仁徳天皇陵や庭園も掲載されている。人工物と自然による空間構成という点で、それらも彼にとっては“建築”だったのである。本の装幀にもこだわり、字配りから表紙のデザインまで手がけた。鹿島出版会から刊行された彼の作品集全8巻[1][1965–80]では、緑の表紙に金の文字、それを収める箱は深紅で銀の文字という、強い色の対比が見られる。

文章を含めた彼の表現には熱い血が通っており、統合への強い意志が込められていることを踏まえて彼の事績を見直せば、多くの示唆が得られるはずである。

ふじおか・ひろやす——東京工業大学大学院教授/1949年生まれ。東京工業大学工学部建築学科卒業。
同大学大学院建築学専攻修士課程・博士課程修了。工学博士。明治大学工学部助手、東京工業大学工学部助教授などを経て現職。
2011年、日本建築学会賞(論文)。
主な著書:『近代の神社景観』[共編著、中央公論美術出版/1998]、『清家清』[共著、新建築社/2006]、『表現者・堀口捨己—総合芸術の探求』[中央公論美術出版/2009]、『近代建築史』[森北出版/2011]など。

常滑陶芸研究所|非相称と色に対するこだわりが随所に見られる、堀口らしい作品
上——全景:正面を中の空間構成に対応して非相称に扱い、3.5m張り出した頂部の庇で全体をまとめている
中——外壁の小口タイル:紫色の彩度を変えてグラデーションを出している
下——エントランス周りのガラス・ブロック:ガラス・ブロックの木口に紫のペイントを塗って、透過する光が紫に霞むようにしている

『**堀口捨己作品・家と庭の空間構成**』|本の表紙が緑で、文字は金色、それを収める箱の色は深紅で、文字が銀と、強烈な色の対比が見られる。堀口は当初この箱を透明のアクリルにするつもりだったが、それをピン角に折る技術が当時はなかったので使用を諦め、次善の策として色の対比を強調することにした。また、この本ではページが横使い、文字が縦書きでレイアウトされているが、それは図をできるだけ大きく見せつつ、スペースを有効に使うためである。合理性をベースにした、対比的な“強い表現”への好みが見られる点で、この装幀も堀口らしい作品といえる[写真提供:筆者]

[1] 堀口捨己著作集(全8巻)[鹿島出版会]
『庭と空間構成の伝統』[1965]
『草庭 建物と茶の湯の研究(復刻版)』[1968]
『茶室研究』[1969]
『利休の茶(復刻版)』[1970]
『堀口捨己作品・家と庭の空間構成』[1974]
『建築論叢』[1976]
『書院造りと数寄屋造りの研究』[1976]
『堀口捨己歌集』[1980]

1

八勝館みゆきの間

竣工年:1950年

所在地:愛知県名古屋市昭和区広路町石坂29
規模:地上1階 | 構造:木造

2

3

4

1——東側の庭から見る:「みゆきの間」の東端で、張り出した濡れ縁が手前に見える。その床板は榑縁(くれえん)で、先端が竹縁になり、雨水を流しやすくするとともに、床の構成に変化を与えている
2——一の間から東側を見る:16畳の一の間と10畳の二の間からなる。一の間と二の間外周にL字型に入側がまわる。一の間・二の間の境の襖を開ければ一体的な部屋として使え、さらに入側境の明かり障子も開放すれば庭の景観も楽しめる。別々に使う時には入側を動線にあてればいいという、機能にも配慮したプランニングである。小壁いっぱいに明かり障子を入れるのが後期の堀口の和風で、これはその最初のもの
3——一の間西側の床の間:当初、八勝館社長(当時)の杉浦保嘉は、銘木を買い集めて大工を指揮し、「みゆきの間」の工事にかかったが、東邦電力社長の松永安左エ門(耳庵)がそれを心配して堀口を推薦し、彼が設計することになった。長大な床框や落し掛け、変化に富んだ空間構成や天井の棹縁の配り方、小壁いっぱいに切られた明かり障子など、後の堀口の和風建築のモチーフがここでまとめて登場した。戦前の堀口の和室にはこれほどのレベルのものはないので、この「みゆきの間」で堀口の和風が一挙に完成したことになる
4——一の間と二の間の境の襖:杉浦は当初、横山大観に襖絵を依頼するつもりだったようだが、堀口はそれをやめさせ、代わりに南方渡来の裂地(11×8尺余り)を裁断したものを組み合わせて襖の飾りにした。その裂は空色の長方形の地に菱形の紫色の紋染めをした木綿地に裁金の摺箔を施したもので、それを36片に切って再構成し、島々が連なる海のような趣に仕立て上げた
[撮影:2010年]

1

明治大学
和泉第二校舎（大教室）

竣工年:1960年

所在地:東京都杉並区永福1-9-1
規模:地上4階｜構造:RC造

2

3

4

1——南側外観:1950年代後半からの大学の定員増に対応して、明治大学でも大教室が多数建設された。この校舎もそのひとつで、7つの大教室を4階建ての建物に収めている。工費がきわめて厳しかったため、堀口は廊下を外に出し(壁2枚分が不要になる)、それを教室床の勾配(1/8)に合わせて配し、そのまま外観に見せた。それらがダイナミックな構成として"強い表現"になっている。音響を考慮して教室壁が柱間ごとに斜めに配されているのも、その表現に寄与している。それらを統合する要素として頂部に庇が巡っている。明治大学のために設計した建物の中で、堀口の建築観が最もよく示された傑作
2——1階南側エントランス
3——1階南側廊下:RC造の建物の場合、堀口は外壁を平滑に扱うのが常だったが、1955年の明治大学駿河台校舎辺りから柱・梁を外観に見せるようになった。内部でも、このように柱・梁をそのまま見せている。それは"強い表現"を好む彼の美学にかなうものでもあったろう
4——大教室:大教室でもコストが厳しく、マイクなしで講義することになっていたため、音響に配慮している。天井の断面は音の反射を考慮しつつ、均一な光が机に当たるように決められている
[写真提供:小林正美]

1

常滑陶芸研究所

（現・常滑市立陶芸研究所）

竣工年:1961年

所在地:愛知県常滑市奥条7−22
規模:地上2階｜構造:RC造

2

3

4

5

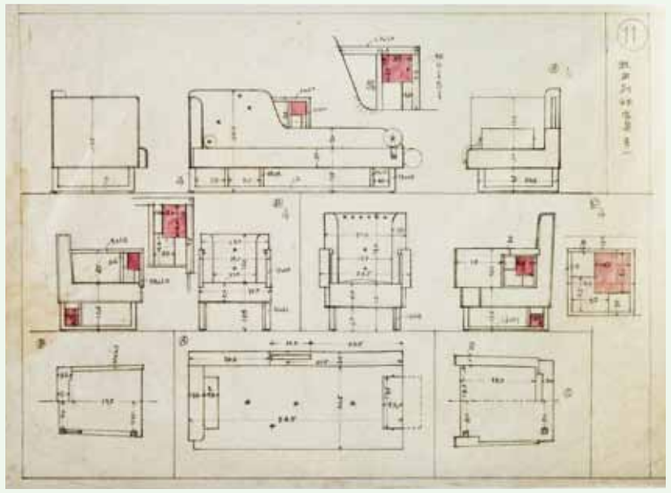
1——正面向かって右側のスロープ:壁や床一面に小口タイルが張られている。玄関外にキャンティレバーで張り出した庇が注目される要素で、その長さと、それを支えるための梁の連続で、"強さ"を演出しているのが堀口らしい
2——正面外観
3——エントランス・ホールの階段:エントランス・ホール正面に、鉄骨で吊られた階段がオブジェのように配されている。その鉄骨はすべて金色にペイントされている
4——展示室:2層吹抜けの展示室で、天井や壁はすべて銀色に塗られ、それがトップライトで鈍く照らされる。トップライトは卍形に配され、空間に変化を与えている。一種異様な空間だが、堀口にしてみれば、展示物(陶磁器)に柔らかく光が回るという機能的な意味と、色に対する自分の好みを重ね合わせたものということになる
5——屋上のトップライト:正方形平面四隅にそれぞれ三角錐を並べ、その外縁の2面から採光するという、堀口創案のトップライト。太陽の移動に対応できることと立面のアクセントになることを意識したもの。明治大学生田校舎にも用いられた

1

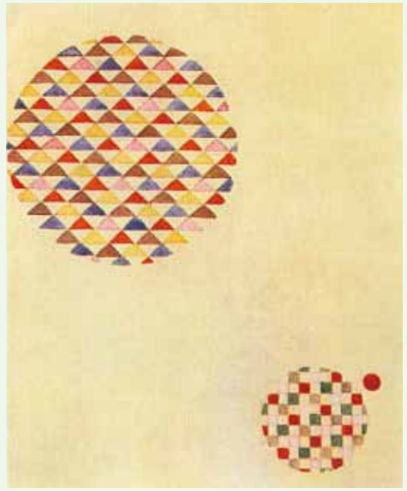
2

3

4

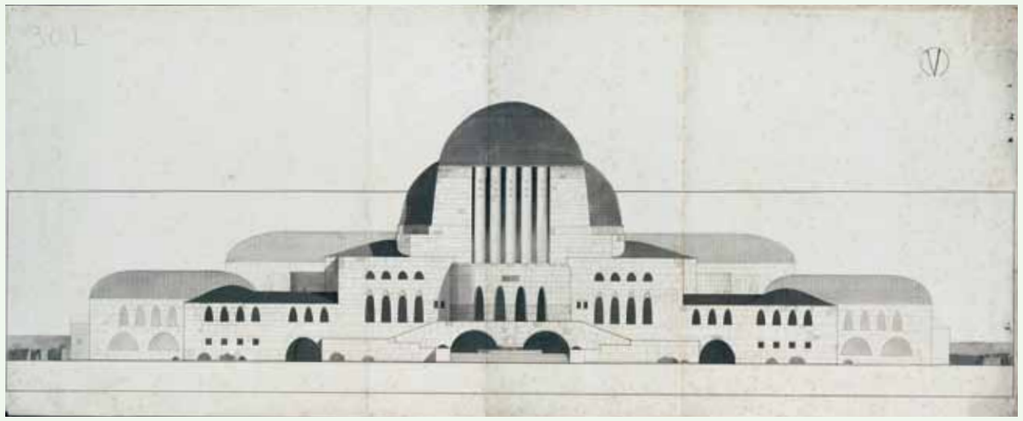


5

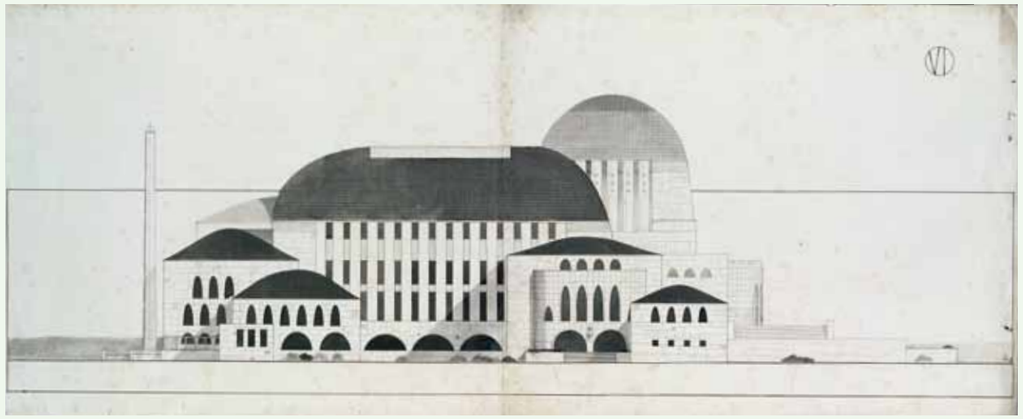


6

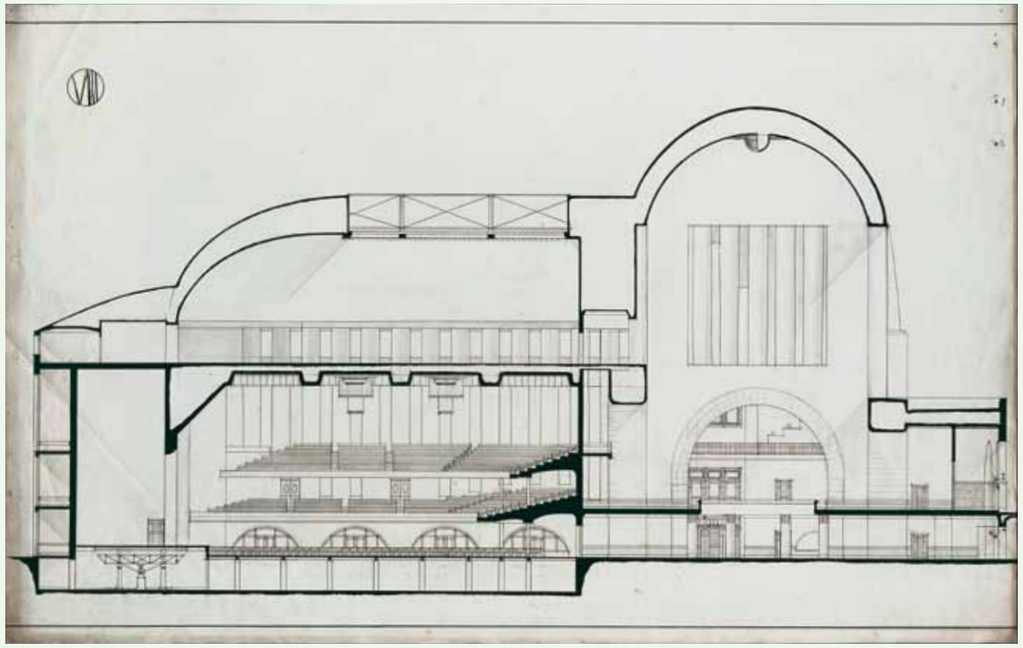
1——『分離派建築会宣言と作品』✧:表紙の図版、および装幀は堀口による｜2——卒業設計「精神的なる文明を来らしめんために集る人々の中心建築」目次[所蔵:東京大学大学院工学系研究科建築学専攻]｜3——平和記念東京博覧会「糸と光との塔」計画案✧｜4——双鐘居客間絨毯✧｜5——紫烟荘絨毯✧｜6——同家具図✧
[✧]出典:『表現者・堀口捨己—総合芸術の探求』



7



8



9

7——卒業設計「精神的なる文明を来らしめんために集る人々の中心建築」立面図正面｜8——同立面図側面｜9——同断面図側面[1920][所蔵:東京大学大学院工学系研究科建築学専攻]

略歴 | Biography

明治28年[1895] 岐阜県本巣郡席田村(現・本巣市上保)に堀口泰一・けいの五男として誕生
大正3年[1914] 岐阜中学校卒業(大正4年卒の可能性もある)
大正4年[1915] 第六高等学校第二部甲類入学
大正6年[1917] 第六高等学校卒業。東京帝国大学工科大学建築学科入学
大正7年[1918] 瀧澤眞弓・山田守と朝鮮・中国に旅行
大正9年[1920] 分離派建築会結成(石本喜久治・瀧澤眞弓・森田慶一・山田守・矢田茂と)。東京帝国大学卒業、大学院進学(大正10年中退)。第一回分離派建築会作品展覧会
大正10年[1921] 平和記念東京博覧会公営課技術員。交通館・航空館、動力館・機械館、電気工業館、鉱産館・林業館を設計。第二回分離派建築会作品展覧会
大正11年[1922] 東京帝国大学建築学科、堀越三郎助教授の助手
大正12年[1923] 鈴村寿々と結婚。渡欧(大正13年帰国)。第三回分離派建築会作品展覧会
大正13年[1924] 第四回分離派建築会作品展覧会。『現代オランダ建築』[岩波書店]出版。清水組技師(大正15年まで)
大正15年[1926] 第一銀行技師(昭和2年まで)。第五回分離派建築会作品展覧会
昭和2年[1927] 建築設計事務所自営。第六回分離派建築会作品展覧会。『紫烟荘図集』[洪洋社]出版
昭和3年[1928] 第七回分離派建築会作品展覧会。『住宅双鐘居』[洪洋社]出版
昭和5年[1930] 『一混凝土住宅図集』[洪洋社]出版
昭和7年[1932] 帝国美術学校(現・武蔵野美術大学)教授(昭和13年まで)
昭和11年[1936] 日本工作文化連盟の設立に参加、理事。『一住宅と其庭園』[洪洋社]出版
昭和13年[1938] 東京女子高等師範学校(現・お茶の水女子大学)兼任講師(昭和21年まで)
昭和19年[1944] 「書院造と数寄屋造の研究」で工学博士(東京帝国大学)
昭和21年[1946] 日本陶磁協会理事。東京帝国大学建築学科兼任講師(昭和28年まで)
昭和23年[1948] 文化財保護専門委員。『草庭』[白日書院]出版
昭和24年[1949] 明治大学工学部教授(建築学科)。『利休の茶室』[岩波書店]出版(翌年、同書で日本建築学会賞・論文賞)
昭和26年[1951] 「八勝館みゆきの間」で日本建築学会賞・作品賞
昭和27年[1952] 『桂離宮』[毎日新聞社]出版(翌年、同書で毎日出版文化賞)
昭和28年[1953] 明治大学工学部長(昭和29年まで)。東京大学大学院兼任講師(昭和30年まで)
昭和32年[1957] 日本芸術院賞。文化財専門審議会専門委員
昭和38年[1963] 数寄屋建築の研究と設計で紫綬褒章。全集『茶室おこし絵図集』[墨水書房]刊行開始
昭和40年[1965] 明治大学定年退職、兼任講師に。神奈川大学工学部教授(建築学科)
昭和41年[1966] 新年歌会始召人。『庭と空間構成の伝統』[鹿島出版会]出版。勲三等瑞宝章
昭和44年[1969] 『茶室研究』[鹿島出版会]出版。日本建築学会大賞
昭和46年[1971] 『現代日本建築家全集4・堀口捨己』[三一書房]出版
昭和49年[1974] 『堀口捨己作品・家と庭の空間構成』[鹿島出版会]出版
昭和53年[1978] 『建築論叢』[鹿島出版会]、『書院造りと数寄屋造りの研究』[鹿島出版会]出版
昭和55年[1980] 『堀口捨己歌集』[鹿島出版会]出版
昭和59年[1984] 逝去(89歳)

主な作品 | Works

大正8年[1919] ぽうたーすろっじ
大正9年[1920] 卒業設計「精神的なる文明を来らしめんために集る人々の中心建築」
大正10年[1921] 大阪市立美術館設計競技応募案 | 平和記念東京博覧会交通館・航空館、動力館・機械館、電気工業館、鉱産館・林業館
大正11年[1922] 平和記念東京博覧会池塔 | この頃、「糸と光との塔」計画
大正14年[1925] 小出邸 | 東京帝国大学図書館建築参考設計草案 | 黒田邸宝庫
大正15年[1926] 紫烟荘
昭和2年[1927] 双鐘居
昭和3年[1928] 牧田ビル
昭和5年[1930] 吉川邸 | 徳川邸
昭和6年[1931] 九州気象台 | 森平兵衛邸洋室
昭和7年[1932] 塚本邸 | 吉川事務所
昭和8年[1933] 中央気象台品川測候所 | 岡田邸 | この頃、帝国美術学校校舎・講堂計画
昭和9年[1934] 永井邸
昭和10年[1935] 飯塚測候所 | 荒尾邸 | 水戸測候所 | 東京横浜電鉄ジードルンク計画
昭和11年[1936] 市街地の一住宅(岡田邸) | 中西邸 | 災害科学研究所
昭和12年[1937] 取手競馬場 | 内藤邸 | 聴禽寮
昭和13年[1938] 山川邸 | 海洋気象台 | 大島測候所
昭和14年[1939] 若狭邸 | 忠霊塔設計競技案
昭和15年[1940] 広島新太郎邸離れ座敷計画 | 渋井邸増改築計画
昭和16年[1941] 西郷邸
昭和21年[1946] 岩波茂雄墓
昭和22年[1947] 明治神宮隔雲亭計画
昭和24年[1949] 尖石遺跡竪穴住居復原
昭和25年[1950] 八勝館みゆきの間・残月の間(八事) | 茨城県庁肥料検査所計画
昭和26年[1951] 美似居 | 日吉ヶ丘高校(木造校舎) | この頃、谷口健康邸増築計画 | ホテル桂計画 | 宇田賢島邸計画
昭和27年[1952] 明治大学聖橋校舎 | 大河内家合同墓所 | 大塚邸計画 | 鳥取映画館計画 | 目白ドレスメーカー学院計画
昭和28年[1953] 八勝館湯殿(八事) | 八勝館旧中店(栄) | 谷口病院改築計画 | 住田邸玄関増築計画
昭和29年[1954] 光悦巴庭によるヴァリエーションの中庭 | 扶桑相互銀行岡山支店
昭和30年[1955] サンパウロ日本館 | 明治大学駿河台大教室・8号館 | 万葉公園・万葉博物館・万葉邸 | 三朝温泉後楽 | 料亭植むら | 和辻(哲郎)家墓
昭和31年[1956] 大森の小住宅(堀口自邸) | 明治大学和泉体育館 | 日本陶磁協会主催「元・明名品展」会場構成と立礼茶席 | 鵜澤聡明墓
昭和32年[1957] 静岡雙葉学園講堂・体育館 | 岩波邸 | 日吉ヶ丘高校(鉄筋コンクリート造校舎)
昭和33年[1958] 八勝館さくらの間・きくの間(八事) | 八勝館音聞ゴルフクラブ(八事) | 明治大学駿河台6号館・7号館
昭和34年[1959] 明治大学駿河台図書館 | 恵観山荘移築工事監修
昭和35年[1960] 明治大学和泉第二校舎(大教室)・学生会館 | 旅館炭屋増築計画
昭和36年[1961] 常滑陶芸研究所 | 和辻家墓所改造計画
昭和37年[1962] 静岡サンモール修道会・礼拝堂
昭和39年[1964] 白川邸 | 明治大学生田校舎1号館・4号館 | 静岡雙葉学園普通教室棟
昭和40年[1965] 明治大学生田校舎2号館・3号館・斜路 | 磵居 | 白川邸増改築計画
昭和41年[1966] 福岡雙葉学園講堂・体育館、小学校舎
昭和42年[1967] 八勝館中店(栄)
昭和43年[1968] 大原山荘
昭和44年[1969] 有楽苑(如庵移築、元庵復元、庭園設計)
昭和45年[1970] 清恵庵
昭和56年[1981] 黄金の茶室復元監修

取材協力:常滑市立陶芸研究所/八勝館
参考資料:『表現者・堀口捨己—総合芸術の探求』藤岡洋保著[中央公論美術出版/2009] | その他:特記のない写真は撮り下ろしです
次号予告:「INAX REPORT No.187」の「続・生き続ける建築」は中村與資平です